熊本市の立田山および託麻三山一帯における 1940年代から1960年代にかけての多様な森林利用

市川　薫

熊本市都市政策研究所　研究員

キーワード：森林利用、立田山、託麻三山、聞き取り調査

1.　研究の背景と目的

都市の緑は良好な生活環境や景観の形成、防災性の向上、生物多様性の保全など様々な役割を担っている。戦後各地で都市化が進む中、国や自治体では様々な方策により都市の緑の保全と創出に努めてきた。熊本市でも1972（昭和47）年の「森の都宣言」の市議会決議に象徴されるように緑の保全と緑化の推進に関する各種取組を進めてきた[1]。市域には立田山や託麻三山など、住宅地の近隣にも比較的規模の大きい森林が維持されている。

都市部に残されたこうした森林は、都市化が進む以前は燃料の採取等により周辺住民の生活と密接にかかわりを持っていたが、戦後の社会経済の変化とともにそうした需要は無くなり、生活に必要な山としての役割は失われている。一方で現在では都市の環境や生活の質の向上に貢献することが期待され、開発行為からは守られている状況ではあるが、適切な管理が加えられない場合は植生が繁茂し、逆に人が近寄りがたい森林が形成されてしまう。

近年、自然共生社会に係る重要性の認識が高まるとともに、緑の「量」の確保に加えてそれらをどう管理し活用していくかという「質」が問われている。過去における人と森林の関わりについて知ることは、今後の新たな関係性を検討する上でも有用であると考えられる。しかし森林の日常的な利用は、それを経験していた人にとってはごく当たり前のものであって、取り立てて記録化されにくい。よって、こうした記憶が失われてしまう前に経験者より利用体験を聞き取り、記録に残していくことは、人と自然の多彩な関わりの実態を後世に伝えるためにも重要なことである。

このような認識のもと、本研究では立田山及び託麻三山を対象に過去における森林の様々な利用とその変化について、市域の今後の持続可能な森林の管理・活用を探る一助として聞き取り調査を実施し記録化を行った。

2.　対象地の概要

熊本市内に位置する立田山及び託麻三山（神園山、小山山、戸島山）を主な対象とし、隣接する地区（立田山では中央区黒髪、託麻三山では東区神園、小山、戸島及び戸島本町）において聞き取り調査を実施した。

2.1　立田山

立田山は熊本市の中心部から北東約 4km に位置する小高い丘陵地帯である（図1、図2）。標高152mの立田山と、その北側の乗越ヶ丘（標高 131m）を含む地域をあわせて立田山と呼ばれることが多い[2]。古くは「黒髪山」

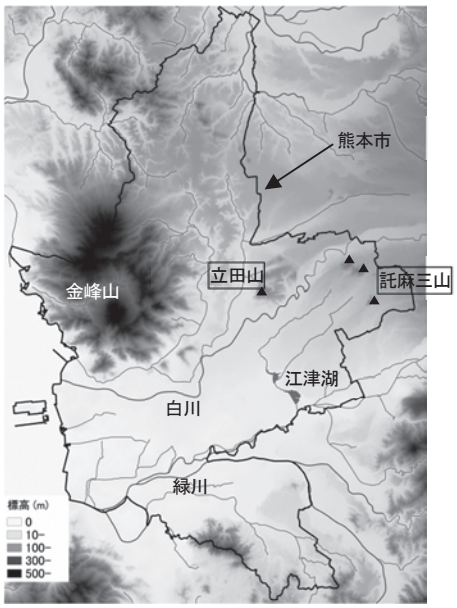


図1　対象地の位置

（データ出典）国土数値情報「行政区域データ」、基盤地図情報「数値標高モデル 10mメッシュ」

と呼ばれ、山全体が黒髪をなびかせたようにうっそうとした森林に覆われていたといわれ、江戸時代には肥後細川藩下の禁制の山として伐採が制限されていた[3]。しかし戦中や終戦直後には伐採や農地化により、立田山一帯の森林の多くは失われ、さらに高度成長期になると宅地開発を前提として不動産会社の所有地になった。こうした中、昭和 40 年代には市民による立田山の保存運動がおこり、1974（昭和 49）年から 1995（平成 7）年にかけて熊本県及び熊本市による土地の買収及び森林整備事業が実施され、現在は約 150ha が「立田山憩の森」として市民に公開されている[4]。また立田山の南側には 1954（昭和 29）年に国の林業試験場熊本支場（現在の森林総合研究所九州支所）が設立され、立田山の南面にその実験林が整備されている。

現在の立田山は植生が回復し再び鬱蒼とした森林になっている。調査を行った黒髪地区に面している立田山南面の大部分は常緑広葉樹の森で覆われている。特に江戸時代に細川家の菩提寺であった泰勝寺跡（明治維新後の神仏分離により廃寺）がある立田自然公園一帯については、戦中戦後の伐採を免れておりコジイを中心とする常緑樹高木林が発達している。戦中・戦後に伐採された場所では、その後の再生や上記整備事業等による植栽などにより植生が回復し、コジイに加えアラカシ、ナナメノキ、クスノキなどが多く、一部にコナラやクヌギ、ヤマハゼなどの落葉樹も生育している。その他、森林総研九州支所及び熊本県林業研究指導所の試験地では、マツ類、アカシヤ類、クリなども植栽されている[5]。

聞き取り調査を実施した黒髪地区は立田山の南側に位置し、現在は住宅地が広がる中に熊本大学等の教育施設が立地している。しかし 1950 年頃までは住宅は少数で付近には田畑が広がっていたことが、後述する聞き取り調査[6]や空中写真[7]から分かっている。

2.2　託麻三山

託麻三山は熊本市東部の託麻原台地の中に島状に位置する丘陵群で、市中心部から北東約 9km の距離に神園山（標高 183m）、小山山（同 189m）、戸島山（同 132m）が位置する（図 1、図 3）。

周辺地域は豊富な湧水の存在も影響して古くから多くの集落や社寺が存在し、人々の生活と信仰の場となって



図 2　立田山
（出典）国土地理院電子 WEB より作成

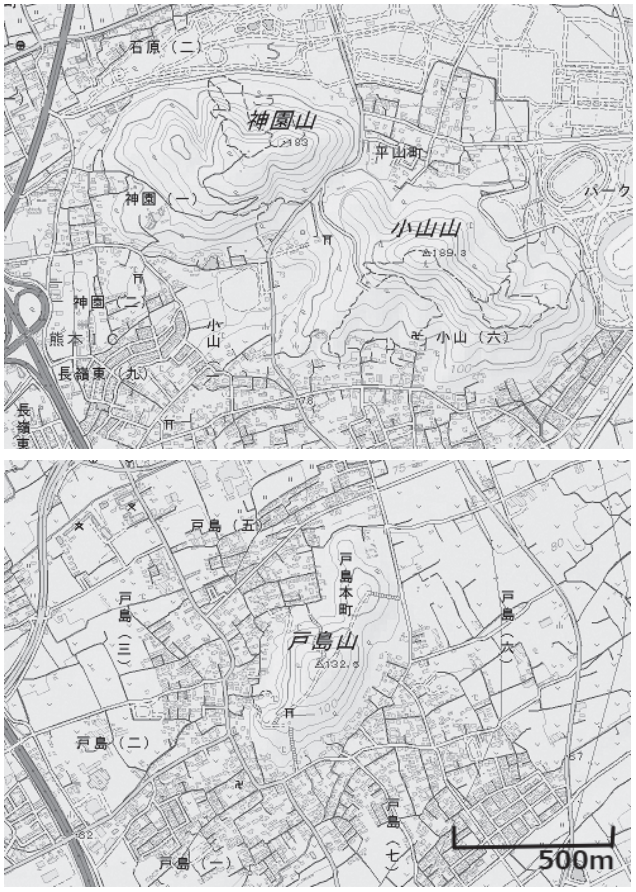


図 3　託麻三山
（上図：神園山・小山山、下図：戸島山）
（出典）国土地理院電子 WEB より作成

いた[8]。大正期には四国八十八ヵ所を模した託麻新四国八十八ヵ所が設立され、現在でも八十八ヵ所巡りや他の史跡を巡る取り組みが開催されている。また従来は水に乏しく穀物や野菜等の畑作栽培が広く行われていたが[9]、1962（昭和37）年に小山戸島地区において県の酪農パイロット農業構造改善事業地区に指定されたのを契機に酪農が盛んになった[10]。一方1970年代には、九州自動車道や熊本東バイパスが建設されるなど地域の都市化も加速した[11]。調査を行った神園山、小山山、戸島山に隣接する地区（それぞれ東区神園、東区小山、東区戸島及び戸島本町）は、現在、住宅地が広がる中に農地が混在している状況である。

託麻三山は1970年代初めに都市計画法による公園や緑地に指定[12]されており、現在まで緑地が残されてきたが、県の総合運動公園に含まれる神園山の北部斜面及び、市有化されている小山山の山腹・山頂部、戸島山の山頂部以外は民有地のままとなっている。託麻三山の森林植生はいずれもコジイやアラカシ等を中心とした常緑広葉樹林であるが、十分な植生管理が行き届いておらず、最近ではモウソウチクの拡大が著しい。これに対して市や地域住民などによる竹の伐採、伐採後の植林などの取組が一部で実施されている[13]。

3. 研究の方法

3.1 聞き取り調査の概要

聞き取り調査は2018年8月から10月に前述の各地区において実施した。調査対象者の選定はスノーボールサンプリングによった。まず各地区を担当する市のまちづくりセンターより初回の聞き取り対象者の紹介を受け、以後は対象者からの紹介によって次の対象者に調査の依頼を行った。対象者は1名を原則としたが夫婦や友人、地区女性会といった複数の場合もあった。立田山地域で3回（のべ10名）、託麻三山地域で6回（のべ7名）、合計9回（のべ17名）実施した。対象者の属性等を表1に示す。対象者の年齢は60代が2名、70代が5名、80代が8名、90代が2名である。また対象者は男性9名、女性8名だが、託麻三山地域では全て男性のみだった。女性のうち7名は一つのグループとして、1名は夫婦として2人一緒に話を聞いた。男性は基本的に現在居住する地区で生まれ育っているが、女性についてはほとんどが市内あるいは県内の他地区から結婚時に現在の地区に移り住んでいる。また託麻三山地域では7名中6名が、本人もしくは親が農業を営んでいたのに対し、立田山地域ではほとんどの対象者の家庭は勤め人だった。

聞き取り調査は半構造化インタビューの形式を取り、1回につき1時間半から2時間程度話を聞いた。内容は森林の利用に関してあらかじめ燃料、農業、食用、遊び、薬用、建材・生活道具、年中行事等の類型を想定し、

表1　聞き取り調査の対象者の概要

地域	地区	対象者の概要				※3記号
		人数	年齢	性別	出生地	
立田山	黒髪	1名	70代	男	黒髪地区	A
		2名（夫婦）	80代（1名）	男	黒髪地区	B
			70代（1名）※1	女	熊本市内	
		7名（地区の女性会）※2	90代（2名） 80代（5名）	女	黒髪地区（1名） 熊本市内（4名） 熊本県内（2名）	C
託麻三山	神園	1名	60代	男	神園地区	D
	小山	1名	60代	男	小山地区	E
		1名	80代	男	小山地区	F
	戸島	1名	80代	男	戸島地区	G
		1名	70代	男	戸島地区	H
		2名	70代（2名）	男	戸島地区	I

※1　結婚以降に黒髪に居住（昭和40年代）。
※2　1名を除き、結婚以降に黒髪に居住。時期は昭和20年代が3名、30年代が2名、30年代もしくは40年代初めが1名。
※3　付表1−8の対象者欄に対応している。

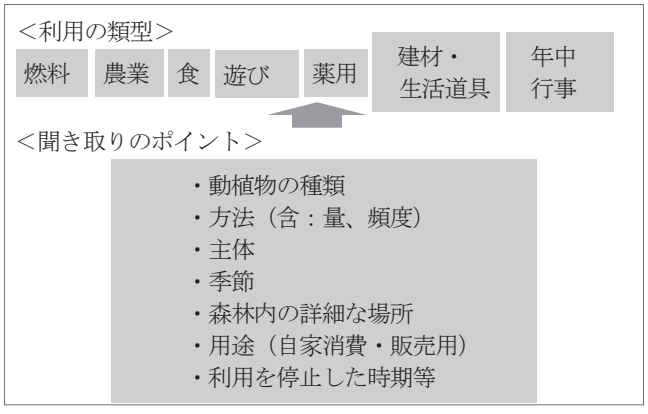


図4　森林利用についての聞き取り調査のイメージ

それらについてどのような利用があったのか話をしてもらった。そして話の流れに応じて、利用した動植物の種類や利用の方法、主体、季節等、適宜質問を加えていった（図 4)。またそうした利用の変化や、森林植生や景観等についても聴取することにした。

対象とする森林は立田山もしくは託麻三山を主としつつ、周囲の平地部の森林にも言及した場合はそれについても聞いた。

対象とする時代については、対象者の記憶のある限り、一部、生まれる前の情報で知っていることも含みつつ話をしてもらったが、主として 1940 年代から 1960 年代の記憶が中心となった。

調査は許可を得て録音し、後日、逐語録を作成した。

3.2 聞き取り内容のとりまとめと本稿の構成

まず、作成した逐語録を内容のまとまりを単位に区切った。そして各まとまりに対して、次のようにテーマや利用の類型を特定した。テーマとしては、

・「1940－60 年代の森林の様子」
・「1940－60 年代の森林利用」
・「現在までの森林の変化」

のいずれかを特定し、これらのうち「森林利用」については、以下に示す類型を特定した。

- 燃料
- 農業
- 食用
- 遊び
- 薬用
- 建材・生活道具
- 年中行事
- その他

さらに、各まとまりについて具体的なトピック（植物名、具体的な用途や利用方法等、各まとまりの内容を端的に示す単語やフレーズ）を抽出した。以上に基づいて、聞き取り内容を整理した。

以下では、4 章から 6 章にわたって聞き取り調査の結果を示す。まず 4 章で 1940－60 年代の森林の様子について聞き取り内容をまとめ、5 章で森林利用について類型別に整理する。そして 6 章で森林の変化や近年の利用についてまとめる。次いで 7 章ではそれらを総括し、8 章で調査の成果と課題を述べる。

なお 5 章については、当時の多彩な森林利用を捉えるために、少数であっても利用したとする発言があれば原則として含めることとした。ただし森林利用には個々の家庭や時代（対象者の年代）により違いがあり、必ずしも広く一般的に全てが行われていた訳ではないことに留意する必要がある。発言の要約については、森林利用の類型別に付表 1－8 に示した。燃料（付表 1）についてのみ全対象者の発言の要約を示し、その他（付表 2－8）については主な発言のみ抜粋して同様の発言がある場合は一つのみを掲載した。付表 1 で全て掲載したのは、燃料が当時の森林の中心的な利用であり、全員から詳しい話を聞くことができたためである。

以下、植物の名称で具体的な種が不明なものについては、総称（カシ、シイ[14]等）を記す。また森林以外の屋敷や畑の周囲等の植物利用の場合は、その旨明記した。

4. 1940－60年代頃の森林の様子

終戦直後の立田山には、泰勝寺の周辺以外には高木はほとんどなく「丸裸」の山だった。その後、国の林業試験場熊本支場が開設され実験林の植林が行われたが、周辺住民による枯れ枝の採取はしばらく続けられており、そのため林床はきれいな状態だった。

託麻三山ではシイやカシなどの常緑樹が多く、クヌギやマツの木もあった。しかしマツは戦時中に供出用の油採取のため幹に切り込みを入れたり、戦後に松くい虫の被害にあったことでほとんど無くなってしまった。戸島山ではほとんどの樹木の樹高はせいぜい 2－3m程度であり、大きな木は戸島神社の周り以外は少なかった。小山山には大きなシイノキがあり山は暗かった印象もあるが、いずれの山でも下草刈りがされていたために林内の見通しがよく、頂上からの見晴らしもよかった。竹林は山の上部ではなく、屋敷地やその周辺、山麓にあった。タケの種類はモウソウチク、マダケ、メダケなどだった。

以前は立田山や託麻三山の周辺の平地部にも、森林が点在していた。立田山の麓の泰勝寺から南に通る道路の東脇には「モミジ山」と呼ばれていた小高い場所があり、モミジやサクラ、クヌギなどの落葉広葉樹があって眺望もよく、子どもの遊び場となっていた。また戸島山の周辺にも平地林が複数あり、クヌギは戸島山より平地林の方に多かった。

5. 1940-60年代の森林利用

5.1 燃料

森林の主な利用はタキモン（焚き物）と呼ばれる燃料材を採取することであり、炊事や風呂を焚くのに欠かせなかった。燃料に関する各対象者の発言を要約して付表1に示す。

燃料材には様々な樹種や部位、並びに加工形態があり、マツやスギの葉、枯れ枝、下草[15]や木の根元の脇からでる細い枝（「シバ」、「ネシバ」等と呼ばれた）、成長したシイやカシ、クヌギなどを伐採し薪割りをしてつくる「ワレキ」などとして使われた。ただし、立田山は対象とした地区の住民の所有地ではなく、下草刈りやワレキを得るための樹木の伐採はされず、主に枯れ枝拾いがされていた。また、託麻三山周辺ではホウキキビやタバコ[16]が一時期生産されており、使用しない茎の部分なども燃料として用いられていた。

枯枝の採取は「タキモン拾い」と呼ばれ、樹種に関係なく落ちているものを拾った。時期は年に一度行うこともあれば、年中拾っていたこともあった。また山にはいわゆる草（雑草）はほとんどなく、地面に生えている竹や雑木の小さなもの、木の根元の脇からでる細い枝（シバ、ネシバ）が鎌や鉈で伐って集められた。こうした作業は「下草刈り」、「根ざらい」、「ネシバ払い」、「ネシバ刈り」、「シバかき」等と呼ばれていた。さらに数年から 10 年程度成長した木は、伐採して一定程度の長さに伐り、家まで運んでから薪割りをしてワレキをつくった。こうした作業は主に農閑期である冬に行われ、燃料材は土間の炊事場に積んでおいたり、床下などの濡れない場所に保管した。枯れ枝の採取は子どもが担っていたことも多かったが、鉈や鎌を使う下草刈りなどの作業や木の伐採、薪割りは大人が中心となって行うことが多かった。

託麻地域のタバコ栽培農家では葉を乾燥させるために薪を多く必要としていたため、必要な場合には他の山の立木を買ったり商店で薪を購入する場合もあった。

燃料は用途や状況に応じて種類の使い分けがされていた。例えばワレキにはすぐには火がつかないため、火付けには枯れ枝やマツやスギ、ヒノキの葉が用いられた。また、短時間の強い火力が必要な場合にはシバが用いられる一方、火持ちが必要なものにはワレキが使われた。冬に暖を採る火鉢やコタツには炭が用いられたが、両地域とも本格的な炭焼きは行われておらず、炭は購入したり風呂焚き等で使用した薪を消し炭にして使った。

1960 年代（昭和 30 年代後半－40 年代前半）には、薪や炭といったそれまでの燃料の多くに取って代わり石油やプロパンが普及した。風呂よりも炊事用の燃料の方が早く変わった場合もあった。

5.2 農業

農業に関連する森林利用は立田山に関してはほとんど聞かれなかったが、農業が盛んだった託麻三山周辺では、堆肥、農用具材等、シイタケ栽培のほだ木等、農業生産の過程で山から採れたものが利用されていた。主な発言を要約して付表2に示す。

山で採取する落ち葉はシバかきをして集められ、堆肥として用いられることが多かった。特に託麻三山周辺ではかつてはサツマイモやタバコの生産が盛んであり、家の前に温床を設置し堆肥を用いて苗づくりを行った。また、畑で使う野菜用の堆肥には人や馬の糞尿、藁やサツマイモのツルなど農作物の残渣がよく用いられたが、山で採ってきた落ち葉も用いられた。

農作業に使う道具としては、ザルや籠などにタケが使われていた。ただしこうした道具類は主には村を定期的に回ってくる職人に作ってもらったり、製品を購入するなどし、自分たちで作っていたのは簡単な道具のみだった。

シイタケの原木栽培は一時期主に自家用に行われ、ほだ木には樹皮の薄いシイやナラよりも長持ちのするクヌギの材を使用した。

5.3 食用

森林から得られた食材として、植物・キノコ類、動物に分けて以下に記す。また主な発言を要約して付表3に示す。

5.3.1 植物・キノコ類

森林には食用となる様々な植物があった。特にタケノコや種実・果実類が多く利用されていた。

タケノコは両地域とも一般的に食されており、種類はモウソウチクやマダケだった。竹山が防風垣を兼ねて家の敷地内にあったり、近隣の平地にある場合はわざわざ山に採りにいくことはなく、また山でも竹林は麓にあった。

種実・果実類の中ではシイの実が広く利用され、子ど

ものおやつ代わりとして集めて持ち帰り、炒って食された。それ以外では、ヤマグリ、ヤマモモ、カキ、ウメ、ヤマブドウ、アケビ、ムベ、ムクノキなどの実も子どものおやつ代わりだった。山以外では、畑や屋敷周りに植わっていたクワ、イチジク、ナツミカン、ユズ、グミ、エノキなどの実も利用されていた。

その他、ヤマイモ掘りは託麻三山周辺で行われていた。

一方、キノコ類や野草の食料利用はあまり多くなかった。特に山で採れる天然のキノコを日常的に食用にしていたことはあまりなく、それはキノコ自体が山にそれほどなかったり、あっても可食かどうかの知識が無かったためだった。なお前述の通り、シイタケの原木栽培は一時期自家用に行われていたこともあった。また高木がまばらな状態だった立田山では、ワラビやゼンマイ、ノビル、セリ、ヨモギなどがあったが、託麻三山では野草を食用に採っていたことはあまり無かった。

5.3.2　動物

山で食用になるものは植物がほとんどだったが、託麻三山一帯ではヒヨドリ、ムクドリ、モズなどの鳥を捕って食べることもあった。現在では禁止されているが、当時は子どもたちが遊びと兼ねて仕掛けを使い、鳥を捕るのを楽しんだ。

5.4 遊びの場

1940－60 年代は子ども時代にあたっていた対象者も多く、山や平地の森林を遊び場として利用していた様子が多く聞かれた。また森林の他に畑、屋敷地、道路や水路など他にも遊び場としていた様々な場所があり、子どもたちは基本的に外で遊んでいた。遊びは植物を使った遊びと虫や鳥など動物を使ったもの、山の地形を活かしたものに分けられた。主な発言を要約して付表 4 に示す。

5.4.1 植物を使った遊び

植物として主に用いられていたのは、当時多く生育していたカシやシイ、タケだった。子ども達は自分で木や竹を加工して遊び道具を作ることも多く、山で遊ぶ際にはナイフを持っていくことが欠かせなかった。

特に多くの人が挙げていたものにゴム銃（パチンコ）作りがあり、Y字状の木の枝を探してくる場合のほか、自分で太めの枝をナイフでくり貫いて作っていく場合もあった。材は強度のあるカシやモミジの木が使われた。またカシは弓をつくったり、チャンバラの刀などとしても使われていた。

タケは、チャンバラや、エノキの実を弾にした竹鉄砲や水鉄砲、竹馬や竹とんぼ、釣竿など、多くの遊び道具の材料になっていた。

対象地では、シイの実以外のクヌギやカシ等の実のことをドングリと呼び、ゴム銃の弾や独楽づくりに使ったり、釣りの餌となる虫を育てるために拾っていた。

5.4.2　動物に関する遊び

夏の楽しみとして、クワガタ、カブトムシ、セミ捕りなどの虫捕りがあった。また、戦後間もない時期は、鳥を捕ることも多かった。託麻三山周辺では、籠に入れたおとりを使ってメジロを捕獲し、観賞用に飼育する家が多かった。また 5.3.2 で挙げたとおり、モズ、ヒヨドリ、ムクドリ等は仕掛けによって捕獲して、食用にもしていた。

5.4.3 地形を活用した遊び

託麻三山では、山の傾斜を利用して滑り台代わりにして遊んでいた。また沢やため池もあり、そういった場所も遊び場になっていた。

5.5　薬用

薬用には、ヨモギとドクダミが比較的多く使われた。これらは必ずしも森林にしかないものではなく、特にヨモギは畑のあぜ道などにも多く生育していた。ヨモギは怪我をした際の止血のほか、乾燥させたものを燻すことで虫除けとしても使われた。ドクダミは干して茶にすると胃腸関係によく、皮膚のトラブルにも使われた。その他、ナンテン（風邪薬）、ゲンノショウコ（胃腸薬）、モモの葉（汗疹）ミカンの皮（虫除け）、クズ（風邪薬、虫除け）も挙げられた。また動物としては、タニシ（風邪薬）も挙げられた。主な発言を要約して付表 5 に示す。

5.6 建材・生活の道具

森林は基本的には燃料用利用が多く、建材として利用することは多くなかった。特に家の建築材として用いるスギ、ヒノキはほとんど生育しておらず、保有する面積も大きくないため、家を建てるのに自分の山の木を使うことはあまりなかった。しかし、小屋など小規模な建物

や、樋、垣根などの部分的な材料として、木竹材が用いられることはあった。

また、生活の中で用いる道具についても、大体のものは購入しており、山から採れる木竹の利用は多くなかった。主な発言を要約して付表 6 に示す。

5.7 年中行事

行事で用いる植物を山から採取することはそれほど多くはなかったが、正月に飾る門松や鏡餅に敷く植物、墓に供える植物などを採ってきていた。また、1 月に行われるドンドヤは、昔は子どもが担う行事で、櫓に使うタケや薪などを山や家々から集めた。主な発言を要約して付表 7 に示す。

5.8 その他

ハゼの実は蝋の原料になり、ツバキの実からは油が搾れるため、多少の現金収入源になっていた。これらは必ずしも森林にあったものではなく、畑や屋敷の周りに植栽されていたことが多かった。また戦時中には供出のため、マツの樹脂、樹皮やラミーの皮、ドングリ、ススキの穂など様々なものを集めたこともあった。マツには幹に切り込みを入れるため、戦後枯死してしまうものが多かった。主な発言を要約して表 8 に示す。

6. 近年の森林の変化

1960 年代より山の利用は徐々に変化した。生活の中で使う燃料がプロパンや灯油となり、燃料材の採取が行われなくなった。また託麻三山では、かつてはサツマイモやタバコの生産に堆肥を使っていたが、酪農が開始されたり、タバコ葉の乾燥に重油が使われるようになるなど、堆肥や燃料材を採るための山への依存が低下した。さらに、子どもの遊びも外遊びからゲームなど室内遊びへと変化していった。

立田山、託麻三山両地域とも、以前と比較して山は荒れてきている。立田山はかつては高木はまばらだったが、現在は樹木が鬱蒼と茂っている。託麻三山でも一部の管理されている公有地や遊歩道等を除き、多くの部分で植生が繁茂して、山に人が入れる状態ではなくなっている。特に以前は山麓にしか生育していなかったモウソウチクが、山頂に向かって生育域を急速に拡大させ、それにより日の当たらなくなったシイやカシ等の枯死を招いている。さらにタケにも一部で枯死が発生し、それらが倒れ重なり合うなどしている。こうした結果、神園山では以前は頂上から 360 度眺望が開けていたが、現在は全く見えない状況になってしまった。なお、一部で民有地の境界や所有者が曖昧になっていたり、管理に関心が及ばない市外や県外の所有者がいることも、管理の難しさの一因となっている。

地元の人を中心に現在も健康維持を兼ねて山に登る人はいるが、燃料材の採取や子どもの遊びの場として山が使われていた頃と比較すると、現在では日常的に人が山に入ることは圧倒的に少なくなっている。

託麻三山地域では近年、荒れて暗くなっている森林の状況を改善し、より多くの人が訪れやすいような山にするために、地元住民により結成された団体や NPO 等が活動している。竹林の拡大に対しては、放置竹林の伐採や跡地への植栽、タケノコ採りの時期に土地所有者以外にも開放する取組みや、採りきれなかったタケノコの除去などを行っている。また通路沿いの倒木など通行の邪魔になる木々を整理するなどしている。この他、通路や頂上等に地元小学校と共に桜の木を植栽するなどの取組みも行ったこともある。

7. まとめ：森林の利用と変化

聞き取り調査から、立田山や託麻三山のかつての身近で多彩な森林利用の姿がみえてきた。調査で確認できた森林利用の類型と用途、利用された動植物の一覧を表 2 に示す。

両地域とも森林の主な利用は炊事や風呂等の燃料材を採取することであり、様々な樹種、部位、加工形態の燃料材が用いられ、火力や火持ちなどの目的に応じて使い分けられていた。石油やガスが広く普及する 1960 年代より前は、森林が日々の生活に欠かせない存在だったことが改めて確認された。また農業用には、託麻三山周辺において、サツマイモやタバコの温床用の堆肥を中心とした利用があった。食材としては、山の麓や屋敷周辺の竹林でタケノコ採りが広く行われていた。そのほかの用途としては、薬用や建材、正月飾りやドンドヤなど、量としてはあまり多くはないものの様々な面で地域の人々の生活と密に関わりを持っていたことが伺える。

森林は子どもにとっても重要な存在だった。公園やテレビゲームが今ほどなかった当時は、森林が子どもの遊

表２　1940－60 年代における立田山、託麻三山一帯の森林利用と利用された動植物

類型	用途	主な動植物	
燃料	食事、炊事用（ワレキ、シバ、枯枝、着火材（葉等））	シイ、カシ、クヌギ、マツ、スギ・ヒノキ（枝・葉）、その他様々な樹種	
農業	堆肥（温床、野菜の肥料）	クヌギ等の様々な樹種の落ち葉	
	シイタケのほだ木	クヌギ	
	農用具（ザル、背負い籠、コイドリ（箕）、ブリコ（脱粒用）、モジキ、手鋤の柄等、竿）	タケ（マダケ、モウソウチク）、カシ等	
食用	食事、おやつ	タケノコ	モウソウチク、マダケ
		樹実	シイ、ヤマグリ、ヤマモモ、カキ、ウメ、ヤマブドウ、アケビ、ムベ、ムクノキ
		キノコ	シイタケ、センボンシメジ、マツタケ
		野草	ワラビ、ゼンマイ、ノビル、セリ、ヨモギ
		イモ	ヤマイモ
		鳥	モズ、ヒヨドリ、ムクドリ、ホオジロ等
遊び	独楽、魚の釣餌、ゴム銃の弾	カシ、クヌギ等の実（ドングリ）	
	ゴム銃（パチンコ）、弓	カエデ、カシ（枝、実）、クヌギ（実）、エノキ（実）	
	チャンバラの刀や野球遊びのバット	カシ、タケ	
	竹馬、竹とんぼ、竹鉄砲・水鉄砲、釣竿、鳥捕りの仕掛け	タケ	
	虫捕り	クワガタ、カブトムシ、セミ	
	鳥捕り	メジロ、ホオジロ、ヒヨドリ、ムクドリ、モズ	
	すべり台（斜面）	葉のついた木の枝	
薬用	止血、消毒、皮膚炎、胃腸薬、風邪薬、虫よけ等	ヨモギ、ドクダミ、ナンテン、ゲンノショウコ、モモ（葉）、ミカン（皮）、クズ（根）、タニシ	
建材・生活道具	建材（柱、梁、小屋、垣根、雨樋等）	スギ、カシ、タケ、マツ、センダン等	
	生活道具（踏み段、メジロ籠、馬車の荷台）	カシ、クスノキ、タケ等	
年中行事	正月（門松、鏡餅等）	ニガタケ／メダケ、マツ、ナンテン、ユズリハ、ウラジロ等	
	ドンドヤ	タケ（モウソウチク等）	
	墓参	クロキ	
その他	ツバキ油	ツバキ（実）	
	蠟	ハゼ（実）	
	戦時中の供出	マツ（樹脂）、ラミー（皮）、その他の樹皮、ススキ（穂）、ドングリ等	

注：聞き取り調査より作成。一部に屋敷地や農地周辺等の植物を含む。詳細は本文及び付表１－８を参照。

びの場となったり、遊び道具の材料を提供していた。また、シイの実やカキ、ヤマモモ等を採ったり、鳥を捕るなどの行為は、食に関する利用行為であると同時に、遊びの一環として行われており、特に様々な仕掛けを使って鳥を捕ることは、子どもにとって大きな楽しみの一つだった。また山の地形、特定の遊び道具に適した樹種や加工の仕方、食べられる実のなる木の場所など、子どもたちは遊びを通じて森林や自然に対する知識を獲得していたと考えられる。

以上のように、1940－60 年代には立田山、託麻三山一帯において、森林は地域の人々の生活に身近な存在であり、日常生活に欠かせないものだったことがわかる。ただし両地域には違いがあり、立田山は広範囲にわたり早くから企業の所有地や公有地であったこと、戦争の影響により樹木がまばらだったことから、立田山の森林の利用は、燃料材の採取は枯枝の採取が主である等、託麻三山に比べて限定的だったと考えられる。

両地域ともかつての森林植生は現在とは大きく異なっていた。立田山では終戦直後は、戦争の影響もあり大きな樹木はほとんどなかった。託麻三山ではシイやカシな

どの常緑広葉樹の他、現在はあまり見かけないマツやクヌギも一般的に見られたという。そして、いずれの山でも林床がきれいに保たれていたことは、現在と大きく異なる。当時は頂上付近から麓まで見通すことができ、頂上からの眺望も良かったことが、多くの聞き取り対象者の印象に残っていた。日常の生活や農業に必要な燃料や堆肥を採取することが、木竹の伐採や下刈りを通じて森林を「きれいに」保つことにつながり、上記のような子どもの遊び場として可能な山にしていた。しかし、国内の多くの里山と同様に、1960 年代からこうした人と森林との関係が大きく変化する（図 5）。周囲の住宅地化の進行や、石油、ガスや電気の普及により山への燃料依存も無くなり、さらに託麻三山周辺では酪農の発展とともに堆肥の必要性も失われた。こうしたことにより山の手入れもされなくなって山が荒れ、人が近づかないものとなっていった。同時にその他にあった様々な利用もなされなくなっていった。

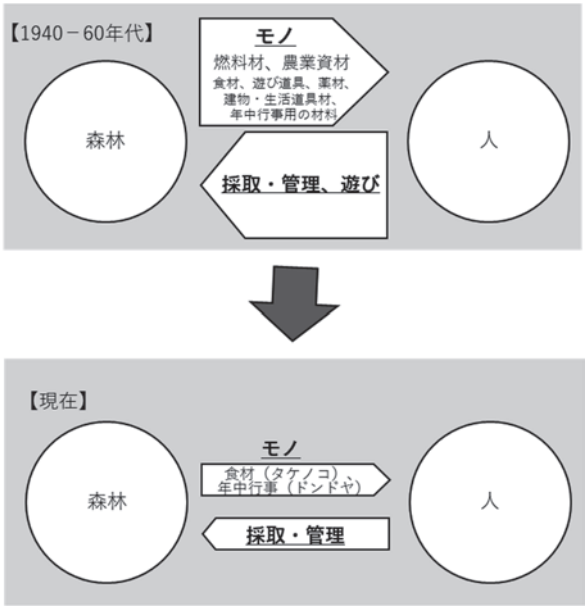


図 5　立田山、託麻三山一帯の人・森林関係の変化

1960 年代以前（上図）には、燃料や農業資材をはじめとして様々なモノが森林から供給されるとともに（上側の矢印）、人はそれらの採取や管理、あるいは遊びという形で森林に関与していた（下側の矢印）。現在（下図）は、森林から入手するものが減り、人の森林への関与も少なくなっており、人と森林の関係が薄れている。

8. 研究の成果と課題

現在の立田山や託麻三山は、竹林やその他の植生の繁茂により人が近づきがたい環境となっている所も多いが、今回の聞き取り調査で、人々の生活に密着した存在であり、燃料をはじめ農業や遊びなど、様々な利用が行われていた往時の姿の一端を明らかにすることができた。

一口に森林利用といっても様々な側面がある。それらについて今回聞き取り調査で得られた内容を基に、図 6 のように利用の目的、対象、場面の三特性に整理した。まず、森林やそこで得られる生物資源を何に利用するかという、利用の目的に相当する「類型」や「用途」がある（図 6 の①）。そして利用の対象である「動植物の種類」や利用する「部位」（同②）、さらにそれらを「採取」または「捕獲」し、「加工」や「保管」を経て、「使用」に至るまでの利用場面（同③）や、各場面における「主体」、「時期」、「方法」、「場所」等である。こうした様々な側面について知恵や知識があり、それらは家庭内や地域内で共有、継承されながら森林の利用が行われてきたと考えられる。

①利用の目的	
類型	用途
燃料	炊事、風呂用燃料
農業	堆肥、ほだ木、農用具
食	食事、おやつ
遊び	遊び道具、虫取り・鳥捕り、滑り台遊び
薬	止血、消毒、皮膚炎、胃腸薬、風邪薬、虫よけ
建材	住居、小屋、垣根
生活用具	踏み段、鳥籠、馬車の荷台
年中行事	正月、ドンドヤ、薬参
加工用原料	ツバキ油、蝋

②利用の対象
動植物の種類
種名等
部位
枝、葉、実等

	③利用場面		
	採取／捕獲	加工・保管	使用
主体	大人・子ども、男・女、自家用・販売用		
時期	季節、時間帯		
方法	手順、技術、道具		
場所	具体的な森林、森林内の位置		

図 6　森林利用の三特性　（本研究を基に作成）

しかし、こうした利用を経験した人々は高齢になってきており、多くの事例を集めることは困難になりつつある。今回の聞き取り調査でも、燃料や堆肥の採取等を中心的に担った大人の視点からではなく、子ども時代にそれらを手伝ったりそばで見ていた経験に基づく話を聞くことも多かった。地域からこうした経験の記憶が完全に失われる前に、記録を残していくことが望まれる。また今回は託麻三山において男性からのみの聞き取りとなったが、森林の利用については男女でも異なる可能性があるため、女性も対象に含めた調査の実施が残された課題である。

調査の中では聞き取り対象者から、今後の立田山や託麻三山について、地域の象徴として残していきたい、人が沢山訪れるような山になってほしい、という声が多く聞かれた。そしてこうした思いの背景には、かつて生活を支えてくれた山であることの認識や感謝、楽しく遊んだ思い出等に根差した山への愛着があることが伺われた。特に託麻三山では、山の現状に懸念を抱き、実際に管理活動を率先して実践している人も多かった。一方で、現在の対象地域には若い世代や、戦後の住宅地開発により新たに居住をはじめた森林利用の経験を持たない住民の方が多く、今後の森林の保全・管理には彼らの協力は欠かせない。地域全体でかつての森林の姿や森林利用についての理解を広めると同時に、現代にふさわしい持続可能な「森林との関係性」をいかにつくるかが課題となっている。単に、公共の緑地として保全継承するだけの対応だけではなく、例えば、フィールドミュージアムなどによりかつての利用方法を伝承する学習施設を設けるなど、より積極的な活用を検討していく必要がある。

謝辞

本稿の聞き取り調査に快く応じて下さった方々に、心より感謝の意を表する。また研究に協力頂いた熊本市の中央区まちづくりセンター、託麻まちづくりセンター、環境共生課、東部土木センターにも感謝申し上げる。

（参考文献・資料）

(1) 熊本市 (2016)『熊本市生物多様性戦略』熊本市，141pp.
(2) 新熊本市史編纂委員会編 (1998)『新熊本市史通史編第 1 巻』熊本市，1028pp.
(3) 新熊本市史編纂委員会編 (1997)『新熊本市史通史編第 8 巻』熊本市，1015 pp.
(4) 長和史（2013）熊本市の都市緑化政策の評価と課題．熊本都市政策 vol.2, pp. 39–49.

---

1 長（2013）
2 新熊本市史編纂委員会編（1998）pp. 187–188
3 熊本市（2016）pp. 69–71
4 熊本市（2016）pp. 69–71
5 新熊本市史編纂委員会編（1998）pp. 189–199
6 後述する聞き取り調査によると、以前は家が点々と建っていた周囲に田畑が広がっており、主に水稲、サツマイモ、ムギが栽培されていた。しかし昭和 28 年に熊本中心市街地や下流域に甚大な被害をもたらした白川大水害以降、被害をまぬがれた当地域では徐々に道路ができ、住宅開発が進行していった。
7 1948 年に米軍により撮影された空中写真による。
8 新熊本市史編纂委員会編（1998）pp. 200–203
9 新熊本市史編纂委員会編（1997）pp. 810–811. また、聞き取り調査によれば、主にサツマイモ、ムギ、陸稲が中心に栽培され、戦前には養蚕や桑の栽培も行われていた。野菜としてはスイカ、トマト、キャベツ、ナタネ、ウリ、サトウキビ、落花生などが栽培された。水田は小山地区にごく小面積あった。現金収入源として、葉タバコやホウキキビの栽培も盛んに行われた。ホウキキビは昭和 30–40 年頃まで地域の特産品で現金収入源であり、素材を出荷する場合も農家が農閑期に箒をつくる場合もあった。
１０ 新熊本市史編纂委員会編（1997）pp.744–745
１１ 新熊本市史編纂委員会編（1997）pp. 810–811. 聞き取り調査によれば、水害以降、被害にあわなかった託麻三山地域では宅地開発が進行し、さらにバブル期の初期頃から、高速道路や東バイパスの整備に伴う土地の収用と開発が進んだ。
１２ 神園山の北部斜面は熊本県民総合運動公園（1971（昭和 46）年都市計画決定）の一部に含まれており、神園山の南部斜面及び小山山は神園山小山山緑地に、戸島山は、戸島山緑地にいずれも 1973（昭和 48）年に指定されている。
１３ 熊本市（2016）p.85
１４ シイの実については、数人にイラストを示して確認したところ、コジイ（ツブラジイ）であった。
１５ 後述するように、下草といってもこの場合は草本（いわゆる雑草）ではなく、樹木の実生や数十センチ程度の若い木を指している。
１６ ホウキキビ、タバコについては、注 9 参照

付表

・各付表の右列「対象者」欄は、発言した対象者を示し、表１の「記号」と一致する。

・対象者が時期を自分の年齢や学年で示した箇所には、生年や年齢からおおよその年を推定し括弧内に注として示した。

付表１　燃料

要約	対象者
風呂焚きや炊事はタキモンでしていた。泰勝寺の周りにはシイやクヌギが多く、落ちている枝を拾ってきた。これは子どもの仕事であることが多かったと思う。皆が枯れ枝を拾うため、木々の下は掃除されたようにきれいだった。1953（昭和 28）年の白川大水害の頃から生活が文化的になってきて、タキモンも拾わないようになってきたように思う。	A
小さい頃、父と兄弟について立田山に行き、枯れ枝を取りに行った記憶がある。ワレキはある程度は購入していたと思う。床下や小屋に保管していた。50 年前頃までは風呂は薪で焚いており、風呂番は子どもの仕事だった。子どもの頃は、米は羽釜で炊いており、家に煙突もあったので炊事の燃料も木だったと思うが、結婚した頃（注：1960 年代中頃）にはガスを使うようになっていた。	B
黒髪に来た 1958（昭和 33）年頃には、炊事には石油をポンプで気化させる器具を使っていたが、その後プロパンガスに変わった。風呂（五右衛門風呂）のほうが遅い時期まで薪を使っていた。焚き付けにはスギ葉や藁の他、薄板の先に硫黄がついたものも使っていた。風呂焚きには火吹き竹を使った。	C
山にタキモンを拾いにいくのが子どもの仕事で、毎日のように、枯れ木なら何でも拾いに行った。主に自分の家の山で拾った。よその山からも拾っていたかもしれないが、昔はどこも競争だったので沢山は落ちていなかったと思う。小さいものは焚きつけに使い、足らない分は冬に木を伐採していたと思う。当時はタバコ葉の乾燥のために多くの薪が必要で、自分の山で足らない場合は小山山などにも買いにいき伐採した。小学校高学年の頃（注：1963-64 年頃）に、タバコ葉の乾燥は重油で行うようになり、炊事でもプロパンを使うようになった。一方、タバコの茎は風呂を焚くのに使っていた。炭焼きに関しては、小さい頃にモミ殻の中に木をいれて炭をつくる程度のものは見たことがあるが、知っている限りではこのあたりでは炭焼きはしていなかった。	D
風呂は小学校の低学年（注：1957-58 年頃）まで五右衛門風呂だった。下から焚くので底が熱くなるため、入るときには木の枠に上手に乗って、枠を平行に下げないとひっくり返って熱かった。風呂焚きも、湯沸しやご飯炊きにも、山からとってきた木をタキモンにした。枯れて落ちた枝や、邪魔になる木、大きく育つと危ない木などを集めた。祖父にタキモンを拾ってくるよう言われ、自分たちは落ちているものを拾った。カマヤと呼んでいた土間になっている炊事場に竈があり、その横に木切れを置く場所があった。農閑期の冬には父達が山で木を伐り、薪割りをしてワレキをつくり、雨に濡れない場所にきれいに並べていた。自分たちも薪割りを手伝ったことがある。薪割りは小学校の高学年（注：1961-62 年頃）の頃まで行っていたと思う。	E
山の木は燃料用以外には使っていなかったと思う。手入れが良く出来ており、新しい木が次々に生えてきた。マツの葉は最初の焚きつけに使い、貴重で奪い合いだった。年に１度、家族皆で山に行き、雑木の柴かきをした。クヌギ、カシ、シイなどの木が多かった。ネシバを伐るのには鋸は使わず鉈や鎌を使った。伐ったものを束ねて結び、背負って山を降りた。3 年くらい成長した大きな木の場合は切り倒して、短い長さに伐って持ち帰り、薪割りをした。薪割りは子どもが行っていた。毎年その繰り返しだった。「キロクタケハチキモトタケウラ（木六竹八木元竹裏）」という言葉があり、「木は（旧暦）６月に伐り、竹は８月に伐りなさい。木を割るときは根元から、竹は上の方（「裏」）から割りなさい。」という意味だった。自分が高校生の頃（注：1951－1954 年頃）には七輪で豆炭も使うようになっていた。風呂は、1958（昭和 33）年に五右衛門風呂からタイル張りのものに変わった時には、燃料はまだ薪だったが、1970（昭和 45）年頃には温水器になった。炊事もそのころプロパンに変わった。	F

炊事用と風呂用（五右衛門風呂）の燃料は少し違った。木の根元の脇から生える小さな木をネシバといい、伐った長いままのネシバは、火力が強いため風呂を焚くのに使った。ネシバを伐ることをネシバ払いとかネシバ刈りといった。一方、竈ではワレキを使った。ワレキは木を伐って斧で割ったものである。特定の種類の木というわけではなく、山の木は全部利用されていた。大きくなったら伐り、また大きくなったら伐るという、サイクル的な利用だった。燃料を取りに行くのは力仕事なので大人の仕事だった。昔はマツも生えていて、ほとんど燃料に使われていたと思う。山にはいわゆる草は少なかった。また、当時畑で栽培されていたホウキキビの茎の部分も燃料や肥料にされていた。自分の家については、商売をやっていて所有する山はなかった。販売用に仕入れた燃料を家でも使用していた。竈に使うワレキは天草のものを小島の港で仕入れ、風呂用のたきぎは益城の方から仕入れていた。自分が 30 歳（注：1965 年）の頃から徐々にプロパンが流行りだしてタキギは使われなくなった。	G
昔は木を燃料として使っていて山はきれいだった。燃料を一番必要としたのは風呂（五右衛門風呂）だった。12 月頃に農作物の取り入れが終わってから 3 月頃までは農作業が無いため、山で下草刈りをして、風呂や炊事の燃料や、堆肥にした。下草というのはいわゆる草ではなくて、小さな竹や雑木のことを指した。子どものころは自分も枯れ枝拾いをした。秋口に拾い、縄で縛り持って帰った。枯れ枝にはすぐ火が点くので、薪割りをしてつくる薪の火種になった。薪割りは大人の仕事で、各家庭で冬場に行っていた。 東京オリンピック（1964（昭和 39）年）より少し前くらい、日本が高度成長に入った頃から生活様式が変わった。風呂も薪で焚く五右衛門風呂から新しいものに変わり、山の手入れもしなくなった。	H
炊事や風呂のタキモンとりを年に一度行っていた。冬は山仕事や箒づくりをする時期だった。小さい木を伐る根ざらいも、麦踏みを 1 回した後くらいの冬の期間に行い、少なくても 1 年、長くても 2 年くらい伸びたものを刈った。また、竈で長く炊くためには薪を使った。そのために 10 年程度の木を伐って馬車に積んで家に持ち帰り、斧で薪割りをし、1 年分を床下に寝せて乾かした。山に行って木を伐ったり薪割りをしたりするのは大人の仕事で、子どもは危ないので運ぶ手伝いをするくらいだった。山にはついて行ったが、近くで餅を焼いたりしていた。 風呂の焚きはじめや、ご飯やおつゆなどを作る際は、すぐ火がつく小枝や作物の殻などを使った。スギやヒノキの枝も火つきがよく、よく燃えた。一方、風呂の温度を維持するのには、長持ちする薪を使った。熱すぎるときには灰を被せておき、再度熱くする際には灰を混ぜて再び火力を強めた。薪は購入せず自分のところで調達できていた。暖をとるのはコタツだった。風呂焚きなどで使用した薪を壺にいれて作った消し炭を使った。夕食後の短時間のみ暖があればよかったので、すぐ火がついたり消せたりする消し炭は便利だった。正月などで客があるときには炭を購入していた。炭焼きは、庭に穴を掘って籾殻をいれた簡易的なものはあったが、この辺りでは本格的な炭焼きはやっていなかった。	I

付表 2　農業

	要約	対象者
堆肥	温床づくりは、まずワラで温床床を編み、その中に落ち葉を詰め込んだ。落ち葉の上に人糞尿をかけて発酵させ、熱がある程度上がって、下がり始めた頃から、土をかぶせて甘藷の種をふせこんだ。当時はビニールがないため、建具の紙に油をぬったものを温床の上にのせた。夜は筵をかぶせて霜よけにした。落ち葉はクヌギの葉が一番よかった。戸島山にはクヌギはあまり多くなく、平地の森林から馬車で沢山運んできた。	I
	山の落ち葉は、背中に背負う籠の中にいれて持ち帰り堆肥にした。野菜をつくる際にはそれが一番よかった。	H
	麦の種撒きは、堆肥を丸めたものに麦の種をいれ、畑にポンポンと入れていった。堆肥には馬糞や人糞、カライモのツルを小さく切ったものや藁を熟成させたものを混ぜた。	F
農用具	自分はできないが、昔の人は竹で籠を作るなどしていたようだ。父親は器用な人だったので、自分で山から竹を採ってきて、割って薄くそぎ、背中に背負う籠や、色々なものを干す籠をつくっていた。	D

	職人が季節的に回って来ていたので、マダケから柴かき用に背負う丸い籠や、様々なものを干すザルなど、色々なものを作ってもらった。6 月頃はタケが割りやすい時期だったが、虫が来やすいためあまり長持ちはせず、毎年のように新しいものに入れ替えていた。	F
	タケで畑仕事に使う道具などを作るのには、特別な道具や技術が必要であったため、自分達では作らず、村を回ってくる職人に作ってもらった。	H
	道具は基本的には買っていた。壊れた際は職人が回ってきたときに直してもらった。「コイドリ」（箕のようなもの）くらいであれば、農家が自分たちでつくっていたかもしれない。これは、堆肥を入れて畑に撒くときに使った。大豆や小豆を脱粒するための「ブリコ」は自分たちでカシとタケを使って作ったし、手鋤の柄にもタケを使った。また、カキの実やハゼの実をとるための「モジキ」という先端を割った竹の棒も、自分達で簡単に作れた。他にも、ホウキキビや大豆、麦などを干すための竿として使う長いタケの棒は、どの家庭にも 10~20 本程度あった。	I
ほだ木	シイタケ栽培は家の裏の小さな湿地帯でほだ木を使ってやっていたようだ。ほだ木には山からクヌギを採ってきて、それに種駒を打ち込んだ。クヌギでないと皮が薄く長持ちしない。	D
	個人の持ち山が小さいので、本格的なシイタケの栽培はなかった。自分の家では、40－50 年位前に自家用にシイタケを作った。ほだ木にはクヌギが一番よかった。シイは皮が薄いので伐ってから寿命が短く、ナラもシイよりは良いもののやはり皮が薄かった。	G

付表 3　食用

		要約	対象者
植物	タケノコ	タケノコは裏山に採りに行っていた。モウソウチクはまだ土の中に入っているものを採った方がえぐみが少なく、マダケは土からヒュッと出ているものをポキンと折って採った。柔らかくて美味しかった。	D
		戸島山の周囲の農家は、敷地の一角にタケを植えていたところが多く、タケノコを掘ったり、防風垣の役割も果たしていた。わざわざ山にいって掘るということは無かった。	H
	樹実	近所には駄菓子屋があったくらいで、食べ物は山に色々あった。山にはたくさんのシイがあった。小さな実が沢山落ちるので、それを集めて持って帰ると、母親が炒ってくれた。パチパチと音をたてポップコーンのように中から白いものがでてきた。塩を少しふると甘味が出た。また、ヤマブドウの小さな房をとって食べたり、ヤマグリを焼いてもらって食べたり、小さな紫色のヤマモモをちぎってそのまま食べたりした。	E
		山の上の方にヤマモモが一本あった。他にも、どの家の庭にはウメがあるなど、子どもたちは、何月頃どこに行けば何があるのかを把握していた。	F
		冬の遊びの一つは、木に登って熟し柿を落とすことだった。屋敷の近くの畑の隅には必ずカキの木が植わっていた。甘柿はあまりなかったので採ると怒られたが、熟して落ちそうになった渋柿は採っても誰にも怒られなかった。また、ナツミカンやユズくらいは採っても怒られなかった。	I
		この辺りは昔、養蚕をやっており、養蚕をやめた後そのまま大きくなったクワの木があった。子どもの頃、そうしたクワの実を沢山食べて口の周りが真っ黒になったのを覚えている。	C
	野草	立田山に登ってノビルとワラビ、セリを採っていた。ノビルはおいしかった。ヨモギはヨモギ餅にした。	C
		戸島山は、原野ではなくシイやカシが多くて暗いので、山菜はあっても少しだけだった。	G
	イモ	ヤマイモはたくさんあった。山以外でも土手があるようなところには自生する。深く掘らないといけないので大人が掘った。前年にヤマイモがあった場所に麦の種を植えて場所が分かるように目印にしている人もいた。	H

キノコ類	シイの木を伐った後には天然のシイタケが生えた。また、センボンシメジもあり、子どものときは雨上がりにすぐ採りにいった。アカマツもあったので昔はマツタケが採れていた。	
動物	現在はもう禁止されているが、子どもの時は食べるものがなかったから、鳥は一番の御馳走だった。また、南郷往還という、通常の道路と雨天時の河川を兼ねているＵ字谷のようになっているところがあり、近くに植わっていたハゼの実を食べにモズなどの鳥が沢山来ていた。それらを追い込むと南郷往還の中を飛んで逃げる習性があったため、ひっかけるようにカスミ網を張っておいた。	H
	今はもうだめだが、以前は冬になると必ず、ヒヨドリ、ムクドリ、モズなどの鳥を捕って食べていた。山で「バッタリ」というタケを使った仕掛けを張って、餌にアワや赤い実などをおき、ヒヨドリやムクドリを捕った。これは遊びでもあった。4−5 か所に仕掛けておくと毎日 1−2 羽は捕れるから、風呂を焚くときに薪で一緒に焼くと親が喜んだ。	I

付表 4　遊びの場

要約		対象者
植物	ゴム銃は手作りだった。Ｙ字型になっている枝を探してきて、両端をゴムで結び、弾（ドングリ）をあてるところだけ、皮やジーパンなどの強い布をつけた。それで小鳥を狙っていた。進化すると一本の枝をくり貫いて作ったりもした。カシが一番強いため多く使った。何年でも使えたが、外で使うと大体なくすので、そうするとまた作った。	I
	カシを伐ってきてナイフを使ってまず板状にし、その後Ｙ字状に形作った。下の持ち手のところは丸くした。友達を真似しながら作った。木を伐って乾かしてから削っていくので、作るのには何日かかかったが、それが楽しかった。	H
	山にはナイフ（肥後守）一本持って遊びに行き、弓を作ったりパチンコを作ったりした。木はカシで、弓の弦の部分はカズラを使った。弓は遊び程度のもので、的を射ったりして、鳥や獣を狙ったりはしなかった。	D
	山の木を折って、刀替わりにしてチャンバラごっこをした。色々な木を使ったがカシが一番きれいで固めだった。器用な子どもは小刀を持って来てきれいにした。	E
	竹鉄砲を作り、弾はエノキの実を使った。「エノミ鉄砲」と呼んでいた。	B
	竹馬のことを「ヒャガシ」と呼び、マダケやモウソウチクのウラダケ（先の方）を使って自分で作っていた。竹馬に乗るときは列をなして、先頭の人を大将にして歩き、先頭が落ちたら二番目の人が大将になった。当時はどこの庭を通っても誰も怒らなかった。	F
	竹馬は低いものから高いものまで様々なものを作った。高いものは 3m くらいあり、小屋の 2 階から乗った。	D
	釣り竿も手作りだった。作る際は、メダケなどの小さいタケを少しもらい、火に炙って大きい石をつるし、まっすぐに伸ばした。	I
	ドングリをゴム銃の弾にして遊んだ。近所に上手な人がいて、弾にするドングリを縁側にばっと並べてゴム銃を打っていた。	A
	ドングリは食べられないけど独楽をつくったりしていた。	C
	秋口に拾い集めたドングリを、土を少し敷いた容器に入れてさらに土をかぶせておく。するとドングリの中にいた虫がある程度成長して土の中に出てくる。その虫だけを瓶に詰めておくと翌年の 9 月頃まで生き、冷蔵庫に入れると 1 年半くらい生きていた。その虫は釣りの餌にして、白川で釣りをした。	I

動物	神社の周りでよくカブトムシやクワガタ捕りをした。朝早くに行くと沢山いて、木に石を当てて揺らすと落ちてきた。神社の土地だから誰でも入れ、近くには池もあり、クヌギの木が多かった。	B
	カシやシイ、クヌギの腐った所から蜜が出てきて、それにクワガタやカブトムシが沢山集まっていた。	F
	子どもが小さい頃、一緒にクワガタを捕りに行った。朝6時頃起きて両ポケットにざくざく入れて帰ってきた。	C
	小山のあたりでは、各戸一羽くらいは竹でつくった籠でメジロを飼っていた。メジロを捕る際には、籠におとりの鳥をいれ、近くの木の枝にトリモチというガムを弱くしたような粘着質のものを巻いておいた。籠をめがけてチョンチョンとメジロがやって来て、トリモチの上に乗って離れられなくなったところを捕まえ、トリモチをきれいに除いて別の籠に入れた。メジロは小さくて飼い易く、鳴き声もよく、目の周りが真っ白できれいだった。特にオスは首から下にかけて白い線がすっと入っていて美しく、鳴き声も高くてきれいだったので、オスがかかるといいと思っていた。	E
地形	戸島山の頂上から下に向かって大きな溝があり、乾いているときには歩いたり木を伐って運び出すのに使い、雨の時は水が流れていた。子どものときは、そこで、葉のついた枝を尻に敷いて滑る遊びをしょっちゅうしていた。	G
	山は自分たちの遊び場になっていた。しょっちゅう登っていると自然と道ができる。山には色々な登り口があり、どこにいっても迷わなかった。小山山には色々な角度の勾配があり、こうした自然の滑り台で遊んだのが一番の思い出だ。傾斜が急でよく滑る場所は土が固くなっていてズボンのまま滑った。	E

付表 5　薬用

要約	対象者
ヨモギは山よりも畑のあぜ道に多かった。怪我をした時は、殺菌になるように、両親がヨモギを揉んでつけてくれた。	E
ヨモギを乾燥させたものを炭火の上に置き、蚊取り線香のように少しずつ燻らせて虫除けにした。ドクダミ草は干して乾燥させ、煎じて飲んだ。胃腸関係に良かった。	I
ドクダミ草は汗疹ができたときに、葉を風呂にいれた。	D
ヨモギの若い葉を揉んで傷口にあて、血止めにした。ドクダミ草は、子どもの皮膚にできものができた際に使っていたのを見たことがある。葉を 5 枚くらい重ねて火の中に入れると、中の方がどろどろとしてくるので、それを皮膚にきれいに塗った。翌日、膿みが吸い出されていてとてもびっくりした。ゲンノショウコは乾燥させて煎じて飲むとお腹の薬になった。モモの葉は汗疹によく、湯につけて使った。ミカンの皮は乾燥させて夕方小さい火鉢にいれて燃やすと、煙で蚊がいなくなった。クズ粉を作るのには、山でクズ根を採ってきて潰してから洗い、上にたまる黒いカスは取り除いたあと、下にたまる白い部分を干して乾かした。風邪の際にはそれを水で溶いて飲ませた。	C
ナンテンの実を湯で焚きあげて汁を飲むと風邪薬になった。シロナンテンが風邪に一番効いた。 小山山と神園山の周りにはため池が多く、タニシが多かった。タニシの汁をとって風邪薬に使っていた。	F

付表 6　建材・生活道具

要約	対象者
今の家を建てるときには材木を自分の家の山から採ってきて柱にした。スギがほとんどで、中にはカシの木が少しあったかもしれない。昔は曲がっている木でも何でも大工さんが上手に使っていた。梁などは曲がっているものを利用した。	D
昔は農家が家を建てるときには山（立木）を買い、その中で使えるものを大工さんにみてもらった。うちでも家を建てたときには父が山を買ってきた。戸島山にはスギは無いので、スギが生えている山を買っていたのだと思う。場所によって使う木の種類を変えていた。例えば煮炊きする炊事場に近いところにはマツを使い、荷重がかかるところには曲がった木を使った。	H
我が家の山で家を建てられるような山持ちはあまりいなかった。小屋くらいはセンダンやカシなどを使っていたようだ。大きいクスノキを伐った際は製材所に持って行き、踏み段などを作った。メジロを入れる籠をつくるのは父や兄が上手で、竹で作っていた。	I
竹は雨樋に使ったり、水源から水を運ぶ樋にしたりした。	F
今はブロック塀が多いが、以前は垣根には竹を使った。	G
鶏小屋の屋根に竹を使った。節を取って表裏を交互に並べていくと屋根ができた。竹は様々なものに利用できたが、腐るのも早かったため何年かするとまた交換した。	A
昔は馬が二頭いて運搬用に馬車を使った。堆肥などを運ぶ荷台の枠をつくるのに、山からカシの木をとってきた。カシは強かった。	E
風呂焚きの際の火吹きは、節をとった竹をつかっていた。	C

付表 7　年中行事

要約	対象者
立田山の頂上より少し下の辺りまで、何回か正月用のマツの枝を採りに行った記憶がある。持って帰ってきたら小さいと言われ、再度採りに行ったりもした。ナンテンも採ってきたと思う。当時はその程度を採りにいっても何も言われなかった。	B
鏡餅を飾るのに使うウラジロやユズリハなどは山から採っていた。それらを下に敷いて餅を置き、ミカンを置いて吊柿を飾った。以前は山にはクロキが多く、年中青々としていた。毎年新しく伸びた長い芽を切って墓に供えた。最近は日が当たらないので、採ってきても 2 日位で葉が弱ってしまう。	F
ドンドヤは、櫓を立てるのは大人も手伝うが、竹を伐ったり薪を採ってくるのは子どもの仕事だった。太いモウソウチクを芯棒にして、まわりに 6−8 本くらいタケを立てかけて縛り、櫓を組み立てた。さらに周囲に 4−5m程度の竹を立てかけて、パンパンと音を鳴らすようにし、中には薪を入れた。現在は中には年末に集めておいた剪定枝などを入れている。	I

付表 8 その他の森林利用

要約	対象者
ハゼは細川藩時代から蝋を作るために植林されており、11 月、12 月に実を採るのを手伝った。「モジキ」という竹の道具を使って採ったり、木に登って枝を引き寄せて手でちぎったりした。実は麻袋に詰めて販売された。畑の周囲にはだいたいハゼの木が数本植わっていて、夏場には日陰で昼食や三時のおやつをとった。	I
ツバキは実が食用油や髪油にもなるため、生産が奨励されていた。実を絞って油にする製油所が近所にいくつかあり、ツバキの実を採取して乾燥させたものを持っていって販売した。	F
戦時中はマツの樹脂の供出をした。マツの根元の方にＶ字の切り込みを入れ、針金で缶を固定しておいてそこに樹脂を集めた。戦後、そうしたマツはポツリポツリと枯れていった。	F